

エッセイ

家の内と外



東方研究会専任研究員
清水晶子

インドでは女性が一人で自由に出歩くのは、まだ一般的ではない。デリー大学の某教授は自ら買い物カゴをさげて市場に行かれていた。旅行にいたってはなおさらである。お世話になっていたインド人家庭の奥様たちも、特に用事がない限り家で過ごすことが多いように見受けられた。ただ夜はあちらこちらから招待を受けて、仕事を終えたご主人たちと一緒に外出していた。

ある時、子守り（アーヤー）に子供を預けて若夫婦がクリケットの試合を見に行った。次の日の朝食の時に、二人は家長であるおじいちゃんに叱責されていた。小さい子がいるのに、特に母親が夜出かけてしまうのはよろしくないというようなことだった。インドはなかなか大変だという思いでお小言を聞いていた。このような環境の中で渡印直後の三週間は、家族と家の生活しか知らなかった。

いよいよこのお宅を出て寮生活を送ることに
なった。ここまでこぎつけるのには、相当の紆
余曲折があった。入寮希望者の受付は、例年新
学年のはじまる7月中頃までには終了してい
る。それに間に合うように、4月に在日大使館
で学生ビザの発行を受けてから、同時に大使館
を通じて寮の部屋の申し込みをしておいた。と
ころが、待てども待てどもナシのつぶて。ビザ
は発行されてから入国まで6カ月の猶予しか
ない。心配になって、その間に数回大使館から
レックスを打ってもらった。インド政府の奨
生には優先して部屋を割り当ててもらえると聞
いていたが、話が全く違う。ビザの入国期限が
切れるぎりぎりまで待ったが、住む所が決ま
らないまま思い切って渡印することになった。

N教授の紹介状を持って、一度東京を案内し
たことがあるという面識だけどころがり込んだ
のが先のジャイナ教徒—ジャインさんのお宅だ

った。今思うとかなり大胆な行動だったと思
うが、心細く思っていた私を暖かく迎えていた
いて、本当にありがたい思いで一杯だった。

そして、ジャインさん一家の経営する書店の
顧問をしているデリー大学の元事務局長だ
った人が文部省、寮監、留学生課にかけ合
って下さった。何とか相部屋ながらも寮に入
ることができた。後で伺った話によると、ど
こでどうなっているのか日本から何度も
レックスを打ったにもかかわらず、一切そ
ういうものは寮監まで届いていなかった
という事だった。初めての事だっただけに、
この話にはさすがに啞然となった。その後、
この手のことにしよつ中出くわすことにな
って、とにかく大事な用件の場合には、必
ず本人が直接出向いて話をしなければなら
ないという事を知らされた。それと
もう一つ。インドで物事をうまく運ぼうと
する際には、「トップダウン方式」を採用し
た方が有



ジャイナ教のお寺

効だということもわかった。

それで、文部省の奨学生担当の人には留学中何かとお世話になった。何か問題が持ち上がる、すぐ文部省まで出かけて行って苦情を聞いていただいた。一留学生に対して「日本から一人で来ていろいろな心配事もあるだろうから、私を父親だと思って困ったことがあったら、いつでも相談にいらっしゃい」と言われたことばが、今も忘れられない。

寮に入るまでは右も左もわからなかった私^が、まがりなりにも一人で何とかやっていけるようになったのは、入学手続きの書類を手にキヤンパスのあちこちのオフィスをたらい回わしにされたことや、文部省まで直談判に行くようになってからであった。困難な問題を処理しなければならぬような時には、必ず手助けをしてくれる人が現われて、いつもうまく切り抜けた。それはきつとインド人の大好きなこと



ジャイナ教のお祭り会場で

ば、「神様のおかげ」に相違ないと思っ
ている。それにインドでは女性にと
って制約も多い代わり、意外に
(と)いっては失礼かも知れない
が)レディー・ファーストの精神が
ゆきわたっている感があり、親切
を受ける機会が多かった。

居心地のよかったインド人家庭
を出て、こわごわの世界に漕ぎ出
した時、思いの外周囲の人々は優
しかった。寮で生活するにあたっ
て奥様たちから生活全般の事に関
して諸注意を受けたこともあり、日
本との習慣の違いにははじめは、
今思うと慎重になり過ぎたかも
しれなかったが、しだいにいろい
ろな人につき合うようになり、行
動範囲も広がった。日々の体験を
自分なりに受容しながら、少しづ
つインドの社会にとけ込んでいけ
たように思う。